

ジェイムズ・ロビンソンと 世界最初の麻酔科学の著書

松 木 明 知

以前の本總會において演者は、一八四六年十月十六日にボストンのマサチューセッツ総合病院で公開実験されたエーテル麻酔法が、約一ヶ月後にイギリス(ロンドンとダンフリー)に伝播された経緯について報告した。今回はこれに関連して英国で最初にエーテル麻酔を行ったジェイムズ・ロビンソンによる世界で最初の麻酔科学の著書について報告する。

ロンドンでは、一八四六年十一月十九日、ロビンソンによってヨーロッパで最初のエーテル麻酔が施行された。同日に、ウィリアム・フレーザーによってスコットランドのダンフリーでもエーテル麻酔が行われたが、手術などの詳細は知られていない。

歯科医ロビンソンは、近所に住むブートからエーテル麻

酔について相談を受けた。ブートが入手した情報は、歯科麻酔に関するものであったことからロビンソンは、イギリスにおける最初のエーテル麻酔の症例を抜歯術とすることに決めた。

以来ロビンソンは、エーテル麻酔に関する文献を集め、一八四七年三月世界で最初の麻酔科学の著書「*A treatise on the inhalation of the vapour of ether for the prevention of pain in surgical operations*」を出版した。著者はウエルカム医史博物館の図書カードによって本書の存在を知っていたが、一九七八年訪英の際、これを実見し、マイクロフィルムを入手研究してきた。本書は一三・五×二一・三cmで六十二頁である。

本書は、従来世界初の麻酔科学書と称されてきたジョン・スノーの「*On the inhalation of the vapour of ether in surgical operations*」の発版日一八四七年九月を遡ること六ヶ月であり、ボストンでのエーテル麻酔の公開実験が米国で行われてから実にわずか約半年後に出版されたことは、驚異的である。

しかし前述したように、その内容に関して言えば、ロビ

ンソン自身の症例を含んでいるとは言うものの、大半はエーテル麻醉に関する雑多な記事の集積と言うべき性格のものであることは否めない。

本書とスノーの本とを比較する時、本書は「世界初の」という形容詞を冠することは出来るが、「科学的な」という形容詞を付するには少し難がある。

ロビンソンが本書の出版を急いだ背景には、ロビンソンとブートが共にアメリカ人であった事実を見逃すわけにはいかない。

当時、エーテル麻醉の発見は、「アメリカの発見」と称されていたことは、アメリカ人がすべての文化面においてイギリスに劣るといふ感を有していたことの一つの実証でもあろう。

このため、同じくアメリカの外科医であったブートの協力を得て著書の執筆を急いだものと思われる。

このようにロビンソンが本書の発行を非常に急いだ陰にはいわゆるシヨウビニズム（愛国主義）が影響したことは否定すべくもない。そしてアメリカ人に劣らずシヨウビニズムを発揮する英国人はこのアメリカ人の業績に対して極

めて冷淡であった。

このことが、これまでの英国の麻醉科学史上、本書が無視されて来た理由の一つであろうと考えられる。

著者が、一九七三年、ロビンソンの業績を発掘してから、改めて彼の事蹟がセント・バーソロミュー病院麻醉科のエリスらによって研究されたことは、洵に喜ばしいことである。

なお、エリス博士は、ウエルカム医史博物館所蔵本とは別に一書を購入し、ファクシミリ版として一九八三年に出版したことを付け加えておく。

（弘前大学医学部麻醉科）